

# 十九世紀英国小説における「家庭の天使」の 言説とその不在

平 林 美都子

“The Angel in the House” and “Her” Absence  
in Nineteenth Century English Literature

Mitoko Hirabayashi

## ヴィクトリア朝の理想的女性像

理想的な女性像としての「家庭の天使」は、ヴィクトリア朝期の言説空間に突如登場する。この言葉が Coventry Patmore の *The Angel in the House* (1855-56) のタイトルから生まれ、当時の社会に流布したのは今では周知のことである。しかし彼は詩の中で「家庭の天使」の具体的な姿を述べているわけではなかった。むしろこの *The Angel in the House* が世にでる前に理想的な女性像が絵画や詩、小説の中ですでにできあがっており、「家庭の天使」という命名があとになったといったほうが正確なのだろう。たとえば Alfred Tennyson の *The Princess* (1847) では、老王が理想的な男女を次のように描いている。

Man for the field and woman for the hearth:  
Man for the sword and for the needle she:  
Man with the head and woman with the heart:  
Man to command and woman to obey;  
All else confusion. (V: 437-441)

男は戦場に女は炉辺  
男は剣を女は針を  
男は頭を女は心を  
男は命じ女は従う、  
そうでなければすべてが混乱<sup>1)</sup>

ここでは男性には外、女性には炉辺＝家庭の役割が割り当てられ、男女のジェンダーが明確に定義されている。十九世紀の女性の理想像は家長長制社会の支配的コードであるジェンダーの産物だった。

John Ruskin はテニスンの老王が語るような夫の陰で従う従順な妻を否定していたが、さりとて男性と対等の立場を女に認めていたわけではなかった。彼は“Queen's Gardens” (1865) の中で、女性はその特有の才能を生かして男性を助けるべきだと、男女のジェンダーを次のように肯定していた。

The man's power is active, progressive, defensive. He is eminently the doer, the creator, the discoverer, the defender. His intellect is for speculation and invention; his energy for adventure, for war, and for conquest, wherever war is just, wherever conquest necessary. But the woman's power is for rule, not for battle,—and her intellect is not for invention or creation, but for sweet ordering, arrangement, and decision. (122–22)

「男性の知性は思索と発明に向いている。戦争が正当、征服が必然であるときにかぎり、彼の精力は冒険に戦争に征服に向いている。しかし女の能力は戦闘にでなく統治に向いている—彼女の知性は発明や創造ではなくて、心地良い秩序、整頓、決定に向いているのである。」

これに続いてラスキンは 'it [home] is the place of Peace...wherever a true wife comes, this home is always round her' (122) と、家庭における女性、すなわち妻を賛美した。十八世紀の後半の産業革命以降に生じた家庭と仕事場の二極分化は、ジェンダー・アイデンティティも二極に空間化することになった。ラスキンもそれに倣い、女性を外界から守られた場＝家庭内に位置づけ、その女性を「女王」と崇拝することによって、彼女に「ミッション」としての役割を授けたのである。すなわち夫には精神的な救済を、子供には道徳教育を施す存在にしたのである。女性の崇拝、神格化は同時に家庭をも神聖な場にするようになった。そして女性と家庭はともにその「神聖な存在」を補強しあうことになるのである。

女性のミッションについて説いたのは男性だけではなかった。Sarah Ellis は当時の女性たちの家庭での役割に応じて、娘、妻、母に向けた著書の中で、それぞれあるべき姿を示した。たとえば *The Daughters of England* (1845) の中で Ellis 夫人は 'To love is woman's nature—to be beloved, is the consequence of her having properly exercised and controlled that nature. To love is woman's duty—to be beloved, is her reward' 「愛することは女性の本質である。愛されることは、女性はその本質をきちんと使い統制した結果得られるものである。愛することは女性の義務であり、愛されることはその報酬である」(Need: 28) といったように、ラスキン同様、本質論から女性性を説いた。

このように女性の本質を考えるとときに、母性はもっとも大切なミッションだとされた。母性は女性の最大の存在理由であり、女性自身の喜びの源だと考えられていた。従って母性愛は女性性の指標となり、あらゆる人間関係の模範とされるべきものだったのである。19世紀の前半、女性の健康と婦人医学が医学の専門分野として登場すると、さらに、女性性は母性と直接に関連づけて定義されることになった。当時の産婦人科医である Samuel Ashwell は、*A Practical Treatise on the Diseases Peculiar to Women* (1844) と題する本の中で、女性の病の一つ、ヒステリーの原因を、母性の欠落として説明している<sup>2)</sup>。

Hysteria dependent on a morbid state of the uterine system.—Such cases are, I believe, more numerous than all those others... Girls menstruating healthily, women married happily, and at a sufficiently early age becoming mothers, and nursing their children, are rarely to be enumerated amongst the hysterical; but girls, in whom chlorosis has delayed, and has perhaps, after all, permitted only the imperfect establishment of puberty and menstruation; women married late, or after great delay, and who, from disparity of age or mutual dislike, bear children at long intervals; and those who, either from the claims of fashionable life, or other insufficient reasons, do not suckle; young widows and the single; in all of whom some uterine derangement may be suspected, and in many ascertained to exist: such individuals are the common subjects of the disease. (Nead: 25—6)

「子宮の状態の異常によるヒステリーは、他のケースよりも非常に多いと思う…少女期に月経が順調で、幸せな結婚をし、早い時期に母親になり、子どもを授乳した女性はめったにヒステリーになることはない。貧血が長引き月経が不完全だった少女、晩婚の女性、夫婦間の性格の不一致などで、間隔をおいて出産した女性、流行の生活をしたなどの理由で授乳をしなかった女性、若い未亡人や独身女性はみな子宮に異常があると思われるし、多くは確かに異常がある。このような女性は共通してヒステリーを起こす」

女性の身体の医学的研究は当時の社会的な女性性と密接な関連があったため、社会的な規範から逸脱した女性は、医学的にも異常だとみなされたのである。19世紀の母性観の矛盾については稿を改めて論じるが、ここでは母性と混同された女性性が、医学的社会的に定義されていたことを強調しておきたい。「家庭の天使」という理想的女性像は、ミッションとしての母性観も変容させていく。すなわち正常な女性は身体性を持たないというように。そして生命体を生み出す女性の肉体性を否定し、母性という精神的なもの、霊的なものにすりかえられていったのである。

カントリー賛美も女性の崇拜と家庭賛美に連動していた。カントリー賛美は、これもまた十八世紀後半の産業化によって、都市とカントリーが分化したときに始まる。しかしカントリー

といえども政治・経済から切り離された不干渉地帯ではありえず、現実には都市と同様、産業化の影響をもろにうけていたわけである。にもかかわらず、カントリーはつねに都市の対極にあるものとして表象されていた。というよりも、都市に住む中流上層階級の理想的空間として美化されていた、と言った方が正しいのかもしれないだろう。都市は人口が肥大し、水や空気の汚染でペストやコレラが数年おきに蔓延するなど、不衛生で貧困と悲惨に満ちていた。都市の荒廃が進むにつれ、対照的にカントリーは、英国の自然と伝統が保持され、道徳と平和が存在するところだとして、いっそう美化されたのである。Charles Dickens の *The Old Curiosity Shop* (1840-41) の中で、祖父とともにロンドンを逃れて安住の地を求める Nell は、'if we were in the country now' (319) と、カントリーに見はてぬ夢を見る。'[F]ar from here' (324) にあるカントリーは、ネルにとって一種のエデン的な地だったのである。Raymond Williams が "English attitudes to the country, and to ideas of rural life, persisted with extraordinary power, so that even after the society was predominantly urban its literature, for a generation, was still predominantly rural" (2) と説明したように、カントリー（農村）は英国国民の、精神の上での「牧歌的避難所」<sup>3)</sup> だったのである。現実にはありえないからこそ、言説空間の「彼方の地」は美しく描かれた。理想的な社会の秩序が存在するところだと信じられていたカントリーは、ラスキンのいう「平安の場所」である家庭のイメージと、ぴったり重なり合った。そしてカントリー賛美と家庭賛美は合体して、男は外へ仕事、女は家庭というジェンダー・アイ



デンティティを強化することになるのである。Edwin Cockburn による *The Return from Market* (図) と題されたカントリーの家庭像は、まさに都市の中流階級のために描かれた絵であろう。ここには都市の対極にあるカントリーと理想的な女性像との類縁関係が見事に描き出されている。

## Dickens の小説と「家庭の天使」

「家庭の天使」と呼ばれた理想的な女性を、ディケンズの具体的な文学作品の中で見ていく前に、なぜ彼女たちが「天使」と呼ばれたのかを考えてみよう。そもそもキリスト教の伝統的な天使とは、男性、それも戦士であった (Auerbach: 70-71)<sup>4)</sup>。17世紀に Milton は *Paradise Lost* の中で天使や墮天使を両性として描いた。

For spirits when they please  
Can either sex assume, or both (I: 423-24)

というのは、天使たちは、気の赴くままに男女いずれの性をも、あるいは同時に男女両性をも、自分の性とすることができたからだ。<sup>5)</sup>

にもかかわらず、*Paradise Lost* の天使は男性の戦士として描写され、読者もそのように読んでいるのである。しかもこうした伝統的な天使は、空間を自在に移動できた。ところがヴィクトリア朝の天使は女性となり、空間も家に限定されてしまった。しかし伝統的な「男性」天使が、神の代理として神聖で正義の力を行使したのに対し、家父長制社会の「女性」天使は男性の代理ではなかった。「家庭の天使」は彼女自身が神聖な力を持っていたのである。

「天使」としての女性は、食欲、物欲をはじめ、性的欲望とも無縁だとされた。十九世紀の医者、R. J. Culverwell は、既婚女性にのみ性欲の存在を認めていたが、未婚であれ既婚であれ、完璧な女性に性欲などありえないとする William Acton の説が、当時の社会では主流だった。<sup>6)</sup> これも身体性を排除した当時の女性観に連動するものである。1823年に英訳されて英国で解禁になったグリム童話には、欲望がある若い娘には罰を、無欲な娘には褒美としての結婚を、というパターンがふんだんにみられるが<sup>7)</sup>、それが受け入れられたのも無私、無欲な女性を理想とする社会を反映しているのだろう。

1840年、1850年代の英国の小説には天使の言説があふれていた。ただし典型的な「家庭の天使」という理想的な女性が主人公となった物語はほとんどないといってよいだろう。以下、ディケンズの *The Old Curiosity Shop* と *David Copperfield* (1849-50) を例にとり、いかに「家庭の天使」の言説が豊富であるにもかかわらず、そこに実体としての天使が不在であったのかをみ

ていきたい。

*The Old Curiosity Shop* のネルには両親がなく、破産した祖父を連れだって放浪の旅をする。彼女には「家庭」すらない。しかし家まで奪われた孤児でありながらも、ネルはある意味では確かに天使であった。それは彼女が無私、無欲だけでなく、生よりも死を、この世よりもあの世に近い存在として描かれていることから明らかだろう。祖父を賭博の誘惑から遠ざけながら長い放浪の旅の最中、親切な学校の先生に再開する直前、ネルの疲労は極限にまで達していた。しかしそのときでも彼女が気遣っていたのは、ただ祖父のことだけだった。

...she lay down, with nothing between her and the sky; and with no fear for herself, for she was past it now, put up a prayer for the poor old man. So very weak and spent she felt, so very calm and unresisting, that no thought of any wants of her own, but prayed that God would raise up some friend for him. (328)

「彼女は自分の身体と天空との間に何の遮るものもないまま横になった。自分の身を心配しての恐怖はもう超越していたので、かわいそうな老人ために祈りをささげた。とても身体が弱って疲れていたので、非常に冷静に抵抗もしないで、自分にはなにも不足がないと感じ、老人のために誰か友人を与えてくださるようにと神に祈った。」

自分自身の欲望は一切なくただ祖父への心遣いをするネルは、この世にいながらすでに天の住人のようである。

その後、先生のはからいで二人は教会の傍らに居心地よい住居を与えられた。しかしネルはその住まいよりも、薄暗い教会の礼拝堂や墓地を好んでいた。こうした性癖も彼女が生よりも死に結び付けられる要因だが、文字どおり彼女に死が近いことは、次第に周りの人も気がつきはじめていた。徐々に身体が弱ってきたネルに向かって、一人の幼い少年は 'why they say...that you will be an angel, before the birds sing again. But you won't be, will you? Don't leave us, Nell' (400) と、泣きながら訴えた。彼女の間近い死が「天使」に喩えられるのは、ネルがこの世の天使、すなわち「家庭の天使」になりえないことを物語っている。それはまた、ネルのかつての使用人 Kit が、婚約者 Barbara に 'I have been used...to talk and think of her, almost as if she was an angel' (505) とネルを天使に結びつけたことと重なり合うだろう。無私、無欲の「天使」ネルは結局この世に「家」を持ち得なかったのである。

*David Copperfield* (1849-50) の Agnes の場合も、ある意味で天使と呼ばれるにふさわしい女性だろう。事実小説の中でも、彼女は天使的言説で描写されている。しかし彼女にしても完全な「家庭の天使」にはなりえなかった。David は叔母の Miss Betsey Trotwood に引き取られた後、弁護士、Mr. Wickfield の家に寄宿することになる。その一人娘がアグネスだった。母を亡くした彼女は、少女期から父に 'his little housekeeper' と呼ばれて家政を取り仕切って

いた。彼女は気の弱い父にだけでなく、寄宿人のデイヴィドにも道徳的な影響を及ぼす、まさに精神的な救済者であった。

The influence for all good, which she came to exercise over me at a later time, begins already to descend upon my breast. I love little Em'ly, and I don't love Agnes—no, not at all in that way—but I feel that there are goodness, peace, and truth, wherever Agnes is; and that the soft light of the coloured window in the church, seen long ago falls on her always, and on me when I am near her, and on everything around. (chap. XVI)

後になって、彼女が僕の上に及ぼすようになった良い影響は、このときすでに僕の胸に伝わりだしていた。僕はエミリーを愛しているがアグネスを愛していない—いや決してそんなふうに愛してはいない—しかしアグネスのいるところはどこでも、善と平和と真実があるように見える、それにずっと前に見た教会のステンドグラスの窓の柔らかい光線がいつも彼女の上にもふりそそぎ、僕が彼女のそばにいるときは僕にも、またその周囲のものにはすべてのものにふりそそぐように思えるのである。<sup>8)</sup>

デイヴィドがウィックフィールドの家を出た後も、アグネスは彼の魂の導き手だった。デイヴィドが 'my good Angel' と呼ぶアグネスは、彼が親友だと信じて交際していた Steerforth の悪魔性を直感的に見抜き、'against your bad Angel' (chap. XXV) と忠告する。

デイヴィドがひそかに Dora と婚約を決めたときも、彼は真っ先にアグネスに手紙を書いた。彼は、将来の妻であるドーラではなくアグネスを家庭の神聖さと結び付けている。

I remember...when the letter was half done, cherishing a general fancy as if Agnes were one of the elements of my natural home. As if, in the retirement of the house made almost sacred to me by her presence, Dora and I must be happier than anywhere. As if, in love, joy, sorrow, hope, or disappointment; in all emotions; my heart turned naturally there, and found its refuge and best friend. (chap. XXXIV)

手紙の途中で…まるでアグネスが僕の家庭の一要素であるかのような考えを抱いたことを覚えている。僕にはほとんど神聖とも思われるこの家の落ち着いた暮らしのなかで、彼女がいるために、ドーラと僕とはどこにいるよりもいっそう幸福であるにちがいないかのように。愛においても希望においても失望においても、あらゆる感情において、僕の心は当然のようにそこに向かっていき、その隠れ家と最善の友を見つけたかのように。

家、家庭の安息や平和と結びつけられたアグネスこそ、ラスキンが「女王の庭」の中で語る理

想の妻の姿であろう。その後ドーラと結婚するにあたって思わぬ障害が生じて、デイヴィドがアグネスに相談に行くときも、彼女のもとで味わう家、家庭の安らぎを次のように語るのである。

"Whenever I have not had you, Agnes, to advise and approve in the beginning, I have seemed to go wild, and to get into all sorts of difficulty. When I have come to you, at last (as I have always done), I have come to peace and happiness. I come home, now, like a tired traveller, and find such a blessed sense of rest!" (chap. xxxix)

「アグネス、僕は事のはじめに、忠告したり賛成してもらうためにあなたがそばにいないと、どうもおかしくなって、なにもかも困難なことになってしまうような気がするのです。結局（いつもそうしてきたように）、あなたのところへくると、僕は平和で幸福な気持ちになれるのです。いまも僕は疲れた旅人のように、家に帰ってきて至福の安息を味わっているのですよ。」

デイヴィドにとって、平和と幸福と安息の場であるアグネスはまさしく「家庭の天使」そのものであった。にもかかわらず、彼は「家庭の天使」ではないドーラを妻とするのである。小説の最終部でデイヴィドの妻ドーラが死に、絶望の中、彼は数年間イギリスを不在にする。帰国した彼は、自分の存在の源がつねにアグネスのうちにあったことをはじめて認識するのだった。

...all my life long I shall look up to you, and be guided by you, as I have been through the darkness that is past...I shall always look to you, and love you, as I do now, and have always done. You will always be my solace and resource as you have always been. (chap. LX)

過ぎ去った暗黒の時もずっとそうだったように、僕は一生の間、あなたを敬いあなたに導かれるでしょう…僕は昔も今もそうだったように、これからもずっとあなたを敬い愛していくでしょう。あなたはいままでもそうだったように、これからも僕の憩いであり僕の存在の源になるでしょう。

デイヴィドから愛を告白されたアグネスは、彼に対して昔から今まで変わらぬ愛情を持ち続けたことを、最後に認める。無私、無欲であった彼女が、ひとたび人間的欲望を認めるとき、小説の中での天使としての彼女の役割は終わるのである。いいかえれば、アグネスは妻になり完全な「家庭の天使」になると同時に、この世とのつながりは切れてしまうのである。'O]ne face, shining on me like a Heavenly light' (chap. LXIV) と天使のように形容されるアグネスは、もはや小説中での居場所はなく、語るべき物語も持たない。



Oh Agnes, oh my soul, so may thy face be by me when I close my life indeed; so may I, when realities are melting from me like the shadows which I now dismiss, still find there near me, pointing upward! (chap. LXIV)

ああ、アグネス、ああ僕の魂よ、僕がこの世を去るときにも、あなたの顔が僕のそばにあらんことを。僕がいま捨てる影のように現実が僕から溶けていくときにも、あなたが僕の近くに来てくれるように、天上をゆびさしながら！

デイヴィド自身にとっても「天使」アグネスとの結婚生活、家庭生活は一足飛びに天を志向することになり、上の言葉をもって現世の物語は幕を閉じるのである。

*Bleak House* (1953) の天史的なヒロイン Esther も、生母の存在は小説の後半に暴露されるものの、最初は孤児として登場する。アグネスにしてもエスターにしても、無私、無欲の彼女たちの物語は、結婚を決めたところで終わる。彼女たちの結婚物語にしても中心のプロットではなく、作品の終わりごろにやや唐突に出現するようなサブプロットでしかない。彼女たちが本当の意味での「家庭の天使」になったとき、もはやヒロインとして存在しえない理由は明白である。無私、無欲の彼女たちには語るべき物語などないからである。それに対し、Jane Austen の小説にみられる結婚物語のヒロインは、人間的な欲望も欠点も持ち合わせているため、語るべき物語がある。また Elizabeth Barrett Browning の *Aurora Leigh* (1857) や Elizabeth Gaskell の *Ruth* (1853) に登場するような「墮落した女」(fallen woman) の改悛物語、マグダレン (magdalen) もののヒロインも物語になりえる。*Ruth* にその典型例が見られるように、そこには「墮落」の原因と結末という、語るべき物語が存在するからである。ルースは未婚の母となった後、天使のような存在として死んでいく。私生児を生んだ Marion Earl も母としての権利を力強く主張する。しかしいずれの女性も「家庭の天使」になることはなかった。

それではなぜヴィクトリア朝に「家庭の天使」の言説だけが豊富になっていったのだろうか。それは、現実には女性が無私、無欲などではありえないために、そしてまた「墮落した女」「家の外の女」があまりにも増大して、その言説が限りなく増殖していったため<sup>9)</sup>、対極の理想像は、いっそう女性への拘束力として強化され流布されねばならなかったからであろう。古いカントリーの崩壊が、理想像としてカントリー神話を増幅していったこととまったく同じ理由である。参照する実体を欠いた「家庭の天使」像は、その不在ゆえに、こうして自由な一人歩きをしていく。そして実体をもたない「家庭の天使」は、長く女性を呪縛していくのである。その強い拘束力から脱するには、女性自らが「天使」を殺さねばならなかった。しかし「天使殺し」を宣言した Virginia Woolf の到来までには、その後100年近くも待たなければならなかったのである。<sup>10)</sup>

## 注

- 1) 本稿での邦訳は特に注記のない場合は、筆者によるものである。
- 2) Elaine Showalter, *The Female Malady: Women, Madness, and English Culture, 1830-1980* を参照のこと。ただし Showalter は女性の病として定着した後のヒステリー症を扱っている。
- 3) Raymond Williams. 彼は1870年代後半にはじまる帝国主義の時代、アジア、アフリカ、南米など遠くの第三世界を「牧歌的避難所」と呼んでいる。
- 4) Nina Auerbach, chap. III を参照のこと。その中で Auerbach はヴィクトリア朝期に天使像が女性化されていく過程を論じている。彼女は Dickens と Thackeray の小説の天使像は、女性化された「家庭の天使」を超越していると述べているが、本稿の主旨は物語における「家庭の天使」の不在である。
- 5) ミルトンの詩の訳は平井正穂訳『失楽園(上)』(岩波文庫)を使用した。
- 6) ヴィクトリア時代の女性のセクシュアリティについては Michael Mason (chap.4) を参照のこと。
- 7) 17世紀にカルヴァン派は国民の道德面を強化するため、ある種の演劇、文学などを禁止した。口承の民話などは子どもたちの教育に良くないものとされた。Jack Zipes, *Victorian Fairy Tales* (introduction) を参照のこと。
- 8) 『デイヴィド・コパーフィールド』の日本語訳は市川又彦訳『デイヴィド・コパーフィールド』(岩波文庫)を拝借したが、一部拙訳を使用した。
- 9) ミシェル・フーコーは『性の歴史』の第1巻で、19世紀において娼婦をめぐる社会的な言説と新たな性の知=権力が増えたと語っている。
- 10) Virginia Woolf は散文 "Profession for Women" の中で、女性が主体となって書くためには、女性自らが内在化した「家庭の天使」を殺さなければならないと述べている。

## 使用文献

- Auerbach, Nina. *Woman and the Demon: The Life of a Victorian Myth*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1982.
- Dickens, Charles. *The Old Curiosity Shop*. Introduced by G.K. Chesterton. London: Everyman's Library, 1966.
- . *David Copperfield*. Introduced by G.K. Chesterton. London: Everyman's Library, 1975.
- チャールズ・ディケンズ『デイヴィド・コパーフィールド』市川又彦訳。岩波文庫。
- ミシェル・フーコー、『性の歴史1—知への意志』渡辺守章訳、新潮社、1986年。(Michel Foucault, *L'Histoire de la sexualité, I, La volonté de savoir*. Galimard, 1976.)
- Mason, Michael. *The Making of Victorian Sexuality*. Oxford: Oxford University Press, 1994.
- Milton, John. *Paradise Lost*. Ed. Alaster Fowler. 1971 rpt. London: Longman, 1982.
- ジョン・ミルトン『失楽園』平井正穂訳。岩波文庫。
- Nead, Lynda. *Myths of Sexuality: Representations of Women in Victorian Britain*. Oxford: Basil Blackwell, 1988.
- Ruskin, John. *The Works of John Ruskin*. Vol. XV III. Ed. T. Cook and Alexander Wedderburn. London: Longman, 1907.
- Showalter, Elaine. *The Female Malady: Women, Madness, and English Culture, 1830-1980*. New York: Penguin, 1987.
- Tennyson, Alfred. *The Poems of Tennyson*, Vol. II. Ed. Christopher Ricks. London: Longman, 1969.
- Williams, Raymond. *The Country and the City*. New York: Oxford University Press, 1973.
- Woolf, Virginia. "Profession for Women." *The Death of a Moth and Other Essays*. London: Hogarth Press, 1981.
- Zipes, Jack, ed. *Victorian Fairy Tales: The Revolt of the Fairies and Elves*. New York and London: Routledge, 1987.